

外史の三鬼龍

ノーリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、三柱の神を背負った男たちがいた。

彼ら三人が揃えば向かうところ敵はなく、そんな日々は永遠に続くものだと思っていた。

しかし、運命は彼らを引き裂き、一人が欠けた。そして残された二人もまた…。

これは、そんな彼らの新たな舞台での勇姿を記したものである。

その舞台の名は、外史。

下 中 上

--	--	--

47 16 1

目次

上

かつて、三柱の神を背負った男たちがいた。彼らは時には互い同士で争い、時には互いで協力し合つて、一言では表せない複雑な関係を築いていた。

そんな彼らだったが、心の奥底ではお互いを認め合つていた。そして、そのうちの一人が言ったのだ。

俺らは兄弟（ブロウ）だ、と。

彼以外の二人も中々口には出したがらなかつたが、それは同じ想いだった。

彼ら三人が揃えば向かうところ敵はなく、気持ち良いぐらいに勝ち続けていった。そして、そんな日々はずつと続くものだど漠然とだが三人とも思つていた。

しかし、運命は皮肉だった。

彼らのうちの一人が交通事故により、あまりにもあつけなくその若すぎる生涯を終えてしまった。残された二人は慟哭し、その理不尽さにこれ以上ないほど憤つた。

だが、時間は戻らない。死が覆ることはない。いくら認めたくない事柄でも、現実起こつてしまえば認めざるを得ないのだ。時間は止まることがないのだから。

そして残された二人は今日も生きる。失つた兄弟のためにも……

「チツ、もう終わりかよ」

つまらなそうに一人の男が呟くと、その手を放した。拘束から解放されたモノがどうと音を立てて地面に倒れこんだ。

倒れこんだそれは、いかついガタイをした男である。その身に特攻服を着ている、いわゆる族という連中だった。そしてその顔面は男にしこたま殴られたのか、酷く腫れ上がって流血していた。

そして呟いた男は、風神の刺繍をしてある特攻服を背負っていた。

「拍子抜けもいとこだぜ……」

その傍らにはもう一人の男。その周囲には同じように小刻みに痙攣している族の連中が転がっていた。そしてその転がっている連中は一人の例外なく、グシヤグシヤになっっている。

つまんなそうというか、不完全燃焼といった表情で懐からタバコを取り出すと、それに徐に火をつけて男は紫煙をくゆらせた。

こちらは、雷神の刺繍の特攻服だった。

「キヨシ、火」

「ああ!？」

風神の男が雷神の男に手を向けた。

「…つたく、しよーがねーな」

雷神…キヨシが懐からライターを出すとそれを風神に放った。風神はそれをキャッチすると同じくタバコに火をつけて啜える。そして彼自身の愛車であるZⅡにその身を預けて軽くふかした。

「よお、ヒロシ、これからどうするよ？」

「あ!？」

風神…ヒロシから、渡したときと同じように放って返されたライターをキャッチすると、キヨシは尋ねた。

「そーだなー…」

トントンと灰を落とすと、ヒロシが腕組みをして考える。

「こんなんじや前座にもなりやしねえ。ストレス溜まるだけだぜ」

「全くだ」

二人してイラついた表情になって唾を吐いた。そんな彼らの周囲には、十人前後の特攻服の男たちが一人の例外もなく血達磨になって転がっていた。

何故こんなことになっているかという大した話ではない。いつものように二ケツ

で走っていたらこの連中に難癖を付けられ、喧嘩を売られたのだ。もともと喧嘩っ早くて血の気の多い二人。しかも最近暴れていなかったこともあってか、ワクワクしながら売られた喧嘩を買ったものの、連中は拍子抜けするぐらい弱くてあつという間に片がついてしまい、今のこの状態というわけだ。

だが、それは仕方のないことである。何せこの二人は猊羅天の特攻一番機なのだ。並の族では満足に相手をすることも出来ない。要は彼らが強すぎたのである。並が、だからといってそれに納得するこの二人ではない。

「あー、クソツッ！」

ヒロシが一番近くに転がっている族の腹に容赦なく蹴りを入れた。

「デメーラから売ってきてこれかよ!? ふざけんなよ、このどチンピラがあー！」

当り散らすようなヒロシにおいおいと思ったキヨシだがその気持ちはよくわかった。何せ自分だって同じ気持ちなのだ。同じように八つ当たりしてもいいのだが、そんな真似をしても腹が減るだけなので止めた。

八つ当たりしているヒロシを尻目に、キヨシはタバコをふかして何の気なしに周囲に目を走らせる。と、不意にあるものに目が止まった。

「あ」

そして、思わず一言呟いた。

「ああん!？」

何も反応のないサンドバッグを蹴ることに飽きたのか、ヒロシがキヨシに視線を向けた。

「どーしたよ？」

「あれだ、あれ」

「あ？」

尋ねるヒロシにキヨシはタバコである方向を指した。ヒロシがそつちを見ると、そこには聞いたこともないバンドのCDのジャケットの看板があった。

そんなものに何故キヨシが反応したかというところ、そこに書いてある絵だった。そこには、猛々しい龍の絵が書いてあったからだ。

「チツ…」

それを見て思うところがあつたのだろう、ヒロシが再びタバコを啜る。

「そーいやあ、もうすぐ一年か…。時貞のバカヤローが逝つちまつてから」

「ああ」

呟いたヒロシにキヨシが頷いた。

「はえーもんだよ」

「フン、止めとけ止めとけ」

「あ?」

ヒロシが何を言ってるかわからず、キヨシが眉をしかめた。そんなキヨシに、ヒロシはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「筋肉ゴリラのおめーが感傷に浸るなんざ似合わねーよ。明日雪になるぜ?」

「んだとお!」

キヨシも黙つちやいない。

「てめーが言えた義理かコラ! 頭の悪さはどっこいどっこいだろうが、このボケ!」

「ああん!」

お互いのこめかみに青筋が浮かび、互いに相手の特攻服の胸座を掴んだ。

「んだこら!」

「やんのかテメー!」

お互い本気でガンを飛ばしあう。まさに一触即発な状況であった。が、

ぐううううっ…

まるでタイミングを見計らったかのように、どちらからともなく二人の腹の虫が鳴った。

『……チツ!』

そのことに毒気を抜かれた二人は、掴んでいたお互いの特攻服から手を放した。

「とりあえずメシにしようぜ」

「そーだな」

二人は頷くと、すぐ近くにあつたファミレスへと単車を走らせたのだった。

「ありがとうございましたー!」

店員に見送られ、ヒロシとキヨシはファミレスから出た。その口には、互いに楊枝を咥えている。そしてお互い満足いくまで食べたのだろうか、入る前の険悪な雰囲気は綺麗サツパリなくなり、いつもの状態に戻っていた。

「ふう…さて…これからどうするよ、キヨシ」

楊枝で口の中をシーシーとやりながら、ヒロシが尋ねた。そして脇に顔を向ける。

しかし、そこにいるべきキヨシの姿はなかった。

「あん?」

何処へいったのかと辺りをキョロキョロ見回す。と、少し離れたコンビニに入つていくキヨシの姿があつた。

「あのヤロー、まだ食い足りねえのかよ…」

流石に呆れた表情になつて愛車のZⅡのところまでタバコを吸いながら待つヒロシ。

暫く食後の一服を楽しんでいると、ようやくキヨシがビニール袋を下げてコンビニから出てきた。

「つたく…」

ピンとタバコを弾くと、吸殻を足で潰す。

「何やってやがんだよ、てめー!」

当然の如くヒロシが詰問した。

「わりーわりー、ちよつとこいつをな」

「あ?」

キヨシが軽くビニール袋を持ち上げた。ヒロシがその中を覗くと、そこにはタバコが数箱と、缶ビールが数本入っていた。

「ふん、今夜飲むやつか?」

「ちげーよ」

「あ?」

キヨシの返答にヒロシが訝しがる。そんなヒロシにキヨシがニヤリと笑うと、

「これから時貞んところに行こーぜ」

と、返したのだった。

「おいおい、マジかよ…」

ヒロシが額を押さえる。

「いーじゃねーか。どうせ楽しませてくれる奴らなんか会わねえだろうし、さつきみたいなどチンピラ相手じゃストレス溜まるだけだし、それにおめーも言つてただろ？ もうすぐ一周忌だぜ」

「おめー、いつからそんな信心深くなつたんだよ」

ヒロシが呆れた表情になつた。

「んなわけねーだろ。それに、おめーもちよつと難しく考えすぎなんだよ」

「あ？」

キヨシの言つたことの意味がわからず、ヒロシが眉を顰めた。

「『兄弟』に会いに行くのに、理由なんかいらねーだろ？ 拓ちゃんに会いに行くのに、理由があるか？」

「：フン、ま、そりやそうか」

ようやく納得したのか、ヒロシが単車に跨つた。いや本当は、ただ表に出すのが下手なだけで、とつくに納得していたのかもしれない。

(ホント素直じゃねーよな、オメーも時貞もよ)

内心でニヤつきながらシートの後ろ部分にキヨシも跨つた。

「出るぜー」

「ああー！」

愛機のZIIに火を入れ、風神と雷神は恐ろしい速さでファミレスを後にしたのだ。た。

「…つたく、俺らがこんな真似するなんてな」

「全くだ。時貞のヤロー、あの世でひっくり返ってんじやねえか？」

「ハハハ、違えねえ」

ZIIを走らせながら、ヒロシとキヨシはそんな会話を交わしていた。

二人はまず、彼らの兄弟…プロウである龍神…天羽時貞が眠る墓所へと向かった。そこにタバコとビールを供えると、軽く二言三言言葉をかけて後にする。

そしてその後、どちらからともなく事故現場にも行こうということになったのだ。今はそこに向かう途上なのだが、自分たちのあまりにありえない行動に自分たち自身でも信じられず、笑いが止まらなかった。

「俺らも丸くなつたのかねえ…」

「バカ言つてんじやねーよ。丸くなつたヤローが、向こうから売ってきたとはいえ喧嘩の相手を血達磨にするかよ」

「それを言うなよキヨシちゃん」

軽快に口を滑らせながら、これまた軽快にZⅡを走らせるヒロシ。そしてもうすぐ事故現場の横浜ベイブリッジに差し掛かるうかという、とある見晴らしの良くない交差点でそれは起こってしまった。

青信号のため当然そこを通ろうとしたZⅡの横つ腹から、赤信号であるにもかかわらずダンプが突っ込んできたのである。

『なっ!?!』

驚いて見上げるヒロシとキヨシ。運転席の運転手が舟を漕いでいるのが、彼らのこの世で見た最後の光景になってしまった。

娑羅天の風神雷神が事故死したという事実は、翌日には周辺の不良たちの誰もが知ることとなった。その報に喜ぶ者もいれば哀しむ者もいた。やりきれない思いを抱える者も、怒りで暴れる者もいた。しかし、誰が何をしようが起こってしまった事実は覆らない。こうして又一つ、不良少年たちの伝説が増えたのだった。

そして死んだ風神と雷神も、再びこの世に生まれるために輪廻の輪に加わる…はずだった。だが何の因果か、それは許されなかった。…いや、確かにその生命は終わりを

迎えたのだ。しかし、まるでそんなことがなかったかのように二人はある舞台へとその存在を移したのだった。

見渡す限りの荒野に、この光景には実に不揃いな三人の少女がいた。彼女たちは一目散にあるところをめがけて走ってくる。

「あやー……変なのがいるよー？」

「男の人だね。私と同じぐらいの歳かなあ？」

「二人とも離れて。まだこの者が何者か分かっていないのですから」

目的地に着いた三人が対象者を少し遠巻きに見ながら口々に好き勝手な感想を漏らす。そこに伏していたのは、風神。

「こ奴……何処から現れたんじや？」

「さつきは居なかった。だけど気がついていたら居た。……さつきの光に関連づけるのが妥当でしょうね」

夜、岩だらけの荒野で褐色の女性二人が話している。その視線の先には言葉通り、先

程まではその場に居なかつた存在があつた。

「光と共に現れた、か。……管路の占いの通りということか？」

「占い通り、ねえ。……ということは、この人が天の御遣いつて奴かな？」

その背中には、雷神を背負っていた。

生を終え、死を迎えたはずの風神と雷神は何の因果か悪戯か、こうして場所も時代も歴史さえも違うこの世界……外史で再び生を得ることとなつた。

そして……

陳留。

そこにある王城で、一人の少女が肩を怒らせながら歩いている。猫耳のフードを被り、身の丈は小さいのだが顔は赤く、表情も憤怒に塗れ、怒りに燃えているのが誰の目からも明らかに見て取れた。

「！ちよつと、そのあんたたち！」

少女は少し先に居た兵士の一団に、まるで怒鳴るかのように声をかけた。

「！っ、これは荀彧様！」

兵士の一人が緊張気味に答えた。残りの連中もその剣幕に圧されたのだろうか、ビシッと姿勢を正す。

「あの男、何処にいるか知ってる!？」

単刀直入に彼女：荀彧が尋ねた。

「あの男…ひよつとして、御遣い様のことですか？」

兵士の一人がおずおずと口を開く。

「あんた知ってるの!？ 何処に言ったか答えなさい！」

返事をした兵士に食って掛かるように荀彧が睨んだ。

「そ、その、天気が良いから外で昼寝でもしてくると…」

「…何ですって?！」

兵士の返答を聞いた荀彧がワナワナと身体を震わせながらゆっくりと俯いた。

「じゅ、荀彧様?！」

おずおずと兵士の一人が声をかける。と、

「ふ、ふ、ふ、ふぎけんじやないわよーっ!!」

彼女：荀彧は突如顔を上げて爆発した。そして兵士達は全員耳が暫く使い物にならなくなるといふ被害を被ったのだった。

「Wow…」

王城の屋根の上でお日様にあたりながら気持ちよさそうに昼寝をしていた男が目を開けて上体を起こした。

「相変わらず小うるさいTinyだぜ…」

男は大きく欠伸をすると、うーんと伸びをする。そして身体を解すためだろうか首を左右に捻った。

銀髪に褐色の肌。そして紅い瞳の、見るからに先程の苟彘や兵士達とは異質な風体をした彼の背中に宿っていたもの。

それは、龍神だった。

中

都である洛陽から少し離れた、とある開けた平野。今ここに、天下の諸侯が数多く軍勢を率いて集結していた。その目的は中央を支配し、圧制を敷く董卓を倒すため…世に言う、反董卓連合である。

その中を、諸侯が集まる軍議の場所目指して進む一団がいた。今は平原の相の身分である劉備…真名は桃花。そして彼女の護衛兼お供である関羽…真名は愛紗と、張飛…真名は鈴々の義理の三姉妹である。

「でも、ようやく着いたね〜」

そう口を開いたのは桃花だった。

「ええ。しかし、着いて早々軍議とはいいい頃合に到着したものです」

「日頃の行いの賜物なのだ！」

「ふふつ、そうだね」

女三人寄れば姦しいというが三姉妹は和氣藹々といった雰囲気で楽しそうに話している。そんな三人を、少し後ろでポーっと思ながらついてくる影が一つ。

「ご主人様？」

その視線に気がついたのか、桃花が自分たちより少し後ろでこつちを見ているその人物に話しかけた。

「ああ!？」

思わず眉を顰めて聞き返したその人物…トレードマークのサングラスこそかけていないものの、地下足袋にニツカボツカ、そして風神の刺繍のしてある特攻服。…まぎれもなく猊羅天の特攻一番機である風神、韋駄天のヒロシだった。

「ひうー!」

刺すようなヒロシの返事に、思わず桃花が愛紗の影に隠れてしまった。

「こ、怖いよ、ご主人様つてば〜…」

「あ、ああ、ワリイ…」

怖がらせるつもりは毛頭なかったのだが、ついいつもの癖で凄んでしまい、ヒロシがすまなそうに謝罪した。が、

「つと、それより桃花!」

何かに気付いたヒロシが桃花の名を呼ぶ。

「な、何?」

おずおずといった感じで桃花が答えた。

「いつも言ってるんだろーが! その『ご主人様』ってのはいい加減ヤメロ!」

「う…だつて…」

ヒロシの指摘を受けた桃花がシユンとする。

「ご主人様はご主人様だし…」

「だから名前で良いって言つてんだろ？」

「で、でもお…」

助けを求めるように桃花が義理の妹である愛紗と鈴々に視線を向けた。しかし、「ヒロシ殿が再三そう仰られているのですから、それでいいのではないですか？」

「鈴々はお兄ちゃんつて呼んでるから、どっちにしる関係ないのだ！」

「うー…二人とも、薄情だよ」

救いの手は差し伸べられなかった。仕方なくヒロシと視線を合わせると、

「その…すぐには無理だと思うけど、なるべく努力しますから、とりあえずそれで勘弁してもらえませんか、ご主じ…つとと、ヒロシ…さん」

「チツ、しゃーねーな…」

言葉通り、本当に仕方ないなといった感じでヒロシが溜め息をついた。取り敢えず了承を得たことに、桃花はホツと一息ついた。

「さて、それでは参りましょう」

「うん、そうだね」

愛紗が促して桃花が頷くと、一向は再び目的地へ向かつて歩き出した。三姉妹はすぐにいつものように賑やかになる。

(しっかし、未だに今の状況が信じられねーや)

先程までと同じようにそんな三人を後ろからボーっと見ながら、少し後ろで彼女たちの後についていくヒロシ。そうしながら、もう何度目になるかわからない、今の自分の状況に思いを馳せていた。

確かにZⅡの横っ腹に居眠り運転のダンプに突っ込んでこられ、ヒロシはキヨシと共にアスファルトに放り出された。全身をしこたま強打し、ろくに動けずに意識も朦朧としていく中、あつけねーと思いつながらヒロシはその目を閉じた。そしてそのまま終わるはずだったのに、何故か意識のある己に戸惑いながらもゆっくりと目を開けると、その目の前にいたのが桃花、愛紗、鈴々の三人だったのだ。

初めて彼女たちを見たヒロシの感想は、みよーなカツコしてやがるなというものだった。だがすぐに、周囲の景色がアスファルトの道路でもなければ今の時間が夜でもないことに気づいたヒロシが、とりあえず目の前にいる桃花たち三人に事情を聞く。そこで得られた情報に、ヒロシは頭がパンクしそうになった。

曰く、ここは幽州とかいうところの、五台山とかいう山の麓である。

曰く、ここは漢とかいう国である。

曰く、世が乱れ、盗賊が蔓延っている。

曰く、そんな世を正すために旗揚げした。

等々、ヒロシとしては、はあ？ とか、おいおい…とかのフレーズの連発であった。

そんな予想外どころか頭の片隅にもない事態に直面したヒロシは、目の前の三人の頭がイカレてるんじゃないかと思つたのだ。そして、彼の中でそれを決定付けたのが、この一言だった。

曰く、管路という占い師がこの地の戦乱を収めるために、天の国から天の御使いなる人物がこの国に降り立つと予言した。そして、自分こそがその人物だ…と。

それを聞いたヒロシは、彼にとつては非常に珍しいことに怯えた様子で乾いた笑いを浮かべた。そして額に汗をかきながら、しゆたつと軽く右手を上げると、じゃ、じゃあなど言い残して一目散に三人から逃げ出したのだ。

やべえ、やべえよ、あいつら…。

そのときのヒロシの偽らざる本音である。そんなヒロシの突然の逃走にビックリして固まった桃花たち三人だったが、少し経つてようやくヒロシが逃げたことに気が付き、慌ててその後を追つたのだ。

三人を置き去りにしたヒロシは、とりあえず視界に入っていた集落に逃げ込んだ。が、その様子を見て愕然となる。

というのも、自分が知っている街の形とはまるで違っていたからだ。コンビニも、自販機も、ビルも道路も車も、単車すらそこにはない。それに、行きかう連中の姿も、現代の日本ではありえない装いをしていた。

どーなってるんだよ、こりゃあ…

目の前の光景に呆然となるヒロシ。だがそれは集落の住民にとっても同じである。いきなり目の前に、自分たちとは全く違った格好をした人間が現れば、不思議に思うのも当然のことだろう。当たり前のように目立ったヒロシは、すぐにこの集落の兵士数人に囲まれ、質問を受けることになった。

だが、そこは流石に摸羅天の特攻一番機の片割れである。唯々諾々とそんなものに従うわけはなく、早々に大立ち回りを繰り広げた。とは言え、剣の切っ先で頬に掠り傷を負い、その武装が本物であることに少々肝を冷やしたが。

それでも流石に喧嘩慣れしているだけあって、致命傷を食らうことなく兵士たちを全員のしたのである。

はあ…はあ…と、荒い呼吸を繰り返しながら額の汗を拭う。桃花たち三人がヒロシに追いついたのはそんなときだった。

しつこく自分を追ってきた三人にゲツ！　と思つたものの、これまでの現状を鑑みてヒロシは取り敢えず三人の話をもう一度だけ聞くことにした。とはいえ、兵士たちをのしてしまつた以上、この集落でそれをするわけにはいかないので、場所をこの集落から一番近くの街に移すことにした。

その城壁をくぐるとき、そして城壁の中の様子を見て、ヒロシの乾いた笑いが再び上がったことを記しておく。

奇妙な四人組はとある飯店の中に入ると、もう一度角を突き合わせてじつくり話し合いを始めた。と言つても、先ほどと同じ話題が繰り返されるだけで目新しい話が出てこない。

が、これまで自分の目で見たこと、そして経験したことを考えれば、今度はヒロシも一笑に付すことは出来なかつた。例えそれが、自分の理解を超え、頭がパンクしそのような事態であつても…である。

脳味噌が熱を帯びていく感覚にヒロシは思わず頭を抱えた。が、もつとも頭を抱えたのはあることを頼まれたときだった。

私たちと一緒に、戦つてください。

それが、これである。いつそ有無を言わさず目の前の連中を殴り飛ばしてバックれることが出来たらどれだけ楽かとヒロシは思つてしまった。しかし、流星に女を…それも

見てくれだけで言えばかなりの上玉の女を殴るのはどうにも気が引けたのでグツと我慢した。

そんなヒロシの逡巡を、自分たちの都合がいいように理解したのか、三人が次々と言葉を重ねた。

これが死後の世界ってヤツなのかよ…。

そんな三人の言葉を聞き流しながらヒロシは思わずそう思ってしまう。だが、これが結果的にはいい切欠となった。

と言うのも、死後の世界なんだつたらこんな感じでも別に変じゃねーのか。という考えに思い至ったからである。多分に現実逃避の側面があるのは否めないが、それでもあーだこーだ考えているよりは百倍マシだった。

そういうある種の開き直りを経て、ヒロシは彼女たちに協力することにした。何せ右も左もわからない世界である。こんなところに一人で放り出されても、そう遠くないうちに行き詰るのは流石にヒロシでも理解できたからである。

こうして彼女たちと行動を共にすることになったヒロシは、その後紆余曲折ありながらも桃花を旗印として着実に勢力を伸ばし、遂にこうして諸侯の一人として反董卓連合に参加するまでに力を付けたのだった。

(夢じゃねーんだよなあ…)

今までのことを思い起こしていたヒロシが思わずそんなことを考える。何回か自分で頬を抓ったことがあるのだが、その度に痛みが走り、これが現実だと教えてくれたのだった。

(…まあ、いい女に囲まれてるだけマシ…か?)

少し前を歩く桃花たち三人を見ながらヒロシはそんなことを考えていた。不思議なことに、自分が厄介になつている桃花たちの陣営には男の幹部が自分しかいない。他は長幼の差はあれど、皆女だった。その点でも変な世界だと思つたヒロシだが、彼も人並みに女は好きなので、不思議には思うもののこの状況は決して嫌ではなかつた。

「あれ?」

と、その時、桃花が急に声を上げた。

「どうしたのだ、お姉ちゃん?」

鈴々が尋ねる。

「うん、あつちから何人か来るよ」

「ふむ…あの姿形は、袁術の客将である孫策かと」

「そうなんだ。よく知ってるね、愛紗ちゃん」

感心したように桃花が愛紗を覗き込んだ。

「朱里や雛里から大陸の主要な英傑の容姿を聞いたことがありますので。孫策と…傍らに居るのは盟友であり軍師である周瑜かと」

「そっかー。それじゃあ、もう一人の男の人は？」

「さて…孫策の陣営にあのような男子がいるとは聞いていませんが…」

「んー、でも、よく見るとあつちの男の人、お兄ちゃんと似たような格好しているのだ」

「ああ？」

鈴々の一言に、それまで興味なき気に三人の言葉聞き流していたヒロシが、思わず三人が視線を向けている方向に同じように視線を向ける。そしてその瞬間、ヒロシは固まってしまったのだった。

少し時間を戻して、桃花たちと少し離れた場所。そこに、桃花たちと同じように軍議の場所へと向かっている一団があった。

「さてさて、どんな感じになるかしらね♪」

楽しそうにそう言うのは孫策。後の呉国の礎を築く小霸王である。

「随分楽しそうね、雪蓮」

そんな彼女を嗜めるように、隣の周瑜が彼女の真名を呼んだ。

「なーにより、何か棘のある言い方ね、冥琳」

孫策…雪蓮が周瑜こと冥琳の発言に不満そうに頬を膨らませた。

「そんなことはないけどね。ただ、目的を忘れられてたら困るから」

「大丈夫よー、ちゃんと覚えてるって。諸侯たちがどれほどの連中か見極めるため…でしよ？」

「ええ。利用できるか、黙殺しても害はないか、敵にしたほうがいいのか、味方に回したほうが得か。そういつたことを判断するのが目的よ」

「わかってるって。全ては孫呉のために…ね？」

「そういうこと」

「ふふっ♪」

クイツと眼鏡を上げて頷いた冥琳に雪蓮が楽しそうに微笑んで頷いた。そんな二人に、

「よー」

彼女たちのすぐ後ろから声をかける人物がいた。

「ん？」

「あら、どうしたの、キヨシ？」

二人して振り返ると、雪蓮がその人物の名を呼ぶ。そこにいたのはヒロシと同じく猿

羅天の特攻一番機であつた雷神：鬼のキヨシの姿があつた。

キヨシもヒロシと境遇はほぼ一緒である。呉の陣營に保護され、神の御遣いとしての立場を頼まれて、彼女らと行動を共にしていた。

「今更言うのもなんだけどよー、俺、行く意味あんのか？」

キヨシは雪蓮と冥琳に問いかけた。

「何故だ？」

冥琳が尋ねる。

「だってよー、お前ら二人で十分なんだろう？　だったら別に俺が行く必要ねえじゃねえか」

そんなキヨシの問いかけに、

「ふふつ、ダメよ」

と、雪蓮が答えた。

「あ？」

雪蓮の答えにキヨシが訝しがった。

「何でだよ？」

そしてその理由を尋ねる。

「貴方のお披露目でもあるからよ」

「？ 意味わかんねー」

「仕方のない奴だな」

冥琳がくいつとかけている眼鏡を押し上げた。

「神の御遣いの噂は既に大陸中に広まっている。そんな中、我が孫呉がその神の御遣いを擁しているとすれば、諸侯に対して一枚も二枚も優位に立てるといいうわけさ」

「そう、上手くいくんか？ どっちかつつーと、無駄に警戒されるつーか、目え付けられるだけだと思っけどなあ…」

冥琳が示した回答に、キヨシは懐疑的である。

「いいのよ、上手くいかなかったって」

が、雪蓮はキヨシの危惧を気にもしてないようだった。

「あ？」

「要は、我が孫呉に御遣いが降り立った…そう周囲、ひいては天下に認識させるだけではないんだから」

「そーかよ。けど、何度も言ってるが、俺はそんなもんじゃ…」

「それは貴方自身が納得してないだけでしょ？ でも、貴方のいた世界とここは全然違うとなれば、そう関連付けるしかないじゃない」

「…まーな」

もう何度目になるかわからない問答を繰り返すと、キヨシはボリボリと頭を掻いた。

「何、心配するな。出発前にも言ったが、お前は何もしなくていい。ただ単に、我らの後ろに黙って立っててくれればいいのだ」

「そーゆーこと♪」

「…おう」

とりあえずこれ以上は話が進展しそうにないのを悟るとキヨシもそこで口を噤んだ。
と、

「あらっ？」

何かに気付いたのか、雪蓮が声を上げた。

「どうした、雪蓮？」

冥琳が尋ねる。

「んー？ あそこにあたしたちと同じ様な一団があるなって思っ」

「どれどれ…」

冥琳もそちらの方へと目を凝らした。

「ふむ…あれは新しく平原の相に任じられた劉備とかいう連中だな」

「そうなの？」

「ああ。問者の報告と姿形が一致する」

「さっすが冥琳、頼りになるう♪」

「我が主君殿がこういうことにあまり興味を持ってもらえないようなのでな。仕方なしの側面もあるのだがな」

「う…」

藪をつついて蛇を出してしまい、雪蓮があははと乾いた笑いを浮かべて誤魔化した。その後、もう一度劉備たちに視線を戻す。

「あれ、あの男…」

その中の一人を見て、雪蓮が怪訝な声を上げた。

「気付いたか？」

「そりゃあね。…ねえ、キヨシ」

「あ?」

二人の会話に興味がなかったのだろうか、どうでもよさげにそっぽを向いて欠伸をしていたキヨシが振り返った。と、雪蓮は劉備たちの一団をスツと指差す。

「あの男、貴方と似たような格好してない?」

「ああ?」

雪蓮が指差した方向を見た瞬間、キヨシも同じように固まってしまったのだった。

「マジかよ…」

「嘘だろ…」

お互いがお互いの姿を捉えた瞬間、猊羅天の風神と雷神は固まってしまった。その様子に気づいたそれぞれの陣営の面々が訝しげに二人に声をかける。

「ご主人様？」

「お兄ちゃん、どうしたのだ？」

「ヒロシ殿、あの男が何か？」

「キヨシ？」

「ふむ…」

ただ一人、周瑜…冥琳だけが何となく悟ったのは流石は軍師というところであろうか。やがて二人はお互いに向けて走り出す。

「あ、ご主人様！」

「ひ、ヒロシ殿、お待ちを！」

「お兄ちゃん、危ないのだ！」

「ちよ、ちよつとキヨシ！」

「やはり…か？」

周囲の面々、桃花、愛紗、鈴々、雪蓮、冥琳もその後を追うように走り出した。そして、

『テメエ!』

手の届く距離まで近づくと、二人はお互い殴りかかった。そして互いに殴りかからなかった方の手でその拳を受け止める。

「ひゃっ!」

「な!」

「ええー!?!」

「ちよ、あんたたち!」

「やれやれ…!」

いきなり殴りかかった二人に、一人を除いて驚く女性陣。そんな彼女たちを置き去りに、二人の男は互いの目を見てニヤリと笑った。

「テメエこら! 生きてやがったんかよう、キヨシい!」

「そりやこつちのセリフだぜ! 何でオメエがいやがるんだよう、ヒロシい!」

二人は殴りかかった拳を開くと、がちりと腕相撲のような形の握手を交わした。

『え? え? え?』

殴りかかったかと思うと、即座に親しげに握手した二人に周囲が混乱する。そんな

中、唯一冷静だった冥琳が少し前に歩み出た。

「キヨシ」

「あ？」

キヨシが振り返る。

「よければ、こちら紹介していただけると有り難いのだがな」

「こいつか？ こいつは俺の“兄弟”だ」

「ほおう、成る程な……」

ま、そんなところだろうなと思った冥琳だったが、そのことは億尾にも出さずに頷いた。

「ほ、ホントなの？ ご主人様」

おずおずと、今度は桃花がヒロシに問いかける。が、

「ご主人様あく!!」

その一言に、キヨシが素つ頓狂な声を上げ、逆にヒロシはヤベツといった表情になった。

「おいおいヒロシちゃんよお、今のは何だよ、あ？」

ニヤニヤしながらキヨシがヒロシの肩を組んだ。

「チツ、勘違いするんじゃないよ、キヨシ」

「あ?」

「こいつがよ」

ヒロシがスツと桃花に指を指す。

「何回注意しても止めねーんだよ。俺が言わしてるわけじゃねえ」

「ほおー」

それでもニヤニヤは納まらないキヨシ。ヒロシはこのヤローといった表情になり、
も注意された桃花はあうう…とへこんでいた。

「せつかくの再会のところ、水を差すようですまないが…」

そんな中、事態を前に進めようと口を挟んできたのはやはり冥琳だった。

「あ?」

「お?」

「今は軍議の場に向けて移動中だったはずだ。積もる話は歩きながらも出来よう。そ
ろそろ再出発したいのだが」

「そうね」

雪蓮も冥琳の意見に同意すると、桃花たちの方に視線を向けた。

「あなたたちもそうでしょ? 劉備」

「え? 私たちのこと、知ってるんですか、孫策さん」

雪蓮から自分の名前が呼ばれたことに驚いた桃花が目を丸くした。

「当然。大陸でも一門の人物の名前を知っておくのは、君主たるものの義務よ」

「ふわー、凄いです…」

未だ駆け出しである自分の存在を知っていたことに、驚きつつも尊敬の眼差しを送る桃花。が、その横で冥琳がジト目で雪蓮を睨んでいることは気が付かなかつたようだ。

そんな冥琳が軽く溜め息をつきながら、何時ものようにクイツと眼鏡を上げて桃花たちを見据える。

「しかし、そちらも我々のことを知っていたようではないか。現時点では袁術の配下でしかない我々のことを」

「こちらにも頼れる頭脳はおりますので」

桃花に代わって愛紗が答えた。

「…失礼、貴公は？」

視線を鋭くして冥琳が尋ねる。

「これは失礼を。劉玄德の家臣で義妹の、関雲長と申します。そしてこちらは同じく家臣で義妹の張翼徳」

「なのだ！」

愛紗に紹介された鈴々がえっへんと胸を張った。

「これはご丁寧に……で、その頭脳とやらはこの場にいらつしやるのかな？」

「残念ながら、今は我らが陣にて留守居役を」

「そうか。……いずれそちらの頭脳とやらにも お目にかかりたいものだ」

「機会があればそうもなりませう」

冥琳と愛紗が静かに視線で火花を散らした。まるでお互い相手を見定めるかのよう
に。

「ハイハイ、そこまでそこまで」

そんな二人の間に割って入ったのは雪蓮だった。パンパンと手を叩いて兩人の肩に
手を置く。

「私たちも貴方たちも、いい加減軍議に行かないと……でしょ？」

「……わかつているわ」

「……そうですな」

雪蓮に諭され、冥琳と愛紗はようやくお互いから視線を外した。

「さ、行きましよ。旅は道連れ、世は情けつてね。せつかくだから、肩を並べて向かいま
しよ」

「そ、そうですね！」

冥琳と愛紗の間に流れていた緊迫した空気に内心でワタワタしていた桃花がこれ幸

いとばかりに同意した。

「宜しくなのだ、お姉ちゃんたち！」

一人そういつた空気とは無縁の鈴々が元氣よく挨拶する。

「宜しくね。えつと、張…」

「張飛なのだ！」

「そ。それじゃ改めて、よろしくね、張飛」

「なのだ！」

そして雪蓮と鈴々が連れ立つように歩き出し始め、残りの三人も彼女たちの微妙な様子を、ヒロシとキヨシは少し離れた場所で見ていた。

「…よう、キヨシい」

ヒロシが徐に口を開く。

「あ？」

「テメーんとこのあの二人、随分クセがあるじゃねえか」

「ちつちつちつ、そいつは違うぜ、ヒロシ」

人差し指を立てると、キヨシはそれを軽く左右に振った。

「あ？」

「クセがあるのはあいっただけじゃねえ。こここの連中はみんなクセがある変わりモンなんだよ。テメーだって思い当たることあんだろ？」

「ハハッ、違えねえや！」

自分の陣営のあの二人のチビっ子やメンマ大好きの顔が即座に浮かび上がり、ヒロシは苦笑せざるを得なかった。と、

「ちよつと、何やってんのよ！」

「ご主人様、早く！」

少し離れたところから、こちらの方に振り返り自分たちを呼んでいる雪蓮と桃花の姿があった。残りの三人もこちらに振り返っている。

「あいつ……またご主人様って言いやがって……」

ヒロシが心底呆れたような表情になった。

「とりあえず合流しようぜ。女を待たせると、後が喧しいからよう」

「そーだな」

二人は連れ立って歩き始めた。その背中に背負った風神と雷神が久しぶりに相棒に会ったからだろうか、なぜかいつもより榮えて見えた。

「さて皆さん、何度も言いますけれど、我々連合軍が効率よく兵を動かすにあたり、たつた一つ足りないものがありますの」

軍議が行われている天幕にて、金髪縦ロールのやたらと偉そうな少女が、その発言通り何度目になるかわからない言葉を発する。

彼女の名前は袁紹。大陸でも屈指の名門の家に生まれ、現時点では大陸でトップクラスの実力者であった。そのため、軍議は彼女の主導のもと行われている。

…まあ実際は、軍議と言つて良いとは思えないような無駄な時間であるのだが。

「兵力、軍資金、そして装備……全てにおいて完璧な我ら連合軍。しかして、ただ一つ足りないもの。さて、それは何でしょう？」

(鬱陶しいわねえ…)

席に着いて先程から彼女の御高説を聞いている諸侯の一人、曹操が呆れ半分、怒り半分で辟易としていた。その口ぶりから、袁紹が総大将をやりたいのは誰でもわかるのだが、彼女は決して自分から言い出さない。誰かに推され、仕方なくその役割を引き受ける…そういう形式を望んでいるのだ。だが諸侯たちも袁紹の望むようにしたことによつて面倒なお鉢が回つてくることを嫌がり、誰も彼女を推そうとはしない。そのため、先程から無駄な時間だけが過ぎていた。

(バカのかせに、ここのところだけは聡いとか面倒臭いんだから)

何度席を立ててやろうかと思ったが、そんな短慮を起こしたせいで損な役回りを引き受けたら堪ったものじゃないので自制していたが、それもそろそろ限界突破しそうだった。

「はあ…」

誰にも悟られないように短く小さく溜め息をつく。しかしそれとほぼ同時に、

「ふあ…」

と、彼女の後ろから声が上がった。驚いて思わず振り返ると、そこに立っていた男が大欠伸を掻いていたのだった。

「華琳、少し出てくる」

そう言つてその男は、天幕を出ようと歩き始めた。

「ちよ、ちよつ」「ちよつと、そこの貴方！」

曹操…華琳が止めようとしたのだが、袁紹が結果的にだがそれに被せる形で憤懣やるかたない声を漏らして彼の足を止めたのだった。

「Wow…」

鬱陶しそうな表情で男が袁紹に振り返った。その身は龍神の刺繍の入ったコートで包まれている…そう、当然彼こそが猊羅天の三鬼龍最後の一人、龍神…天羽時貞だった。

「…何だ？」

少し苛立たし気に時貞が口を開いた。

「貴方、何考えてますの!?! この大切な軍議を勝手に中座どころか、欠伸まで搔くなんて! 何なんですかの華琳さん、その男は!」

「天の御遣いよ。聞いたことあるでしょ、貴方も」

いい加減馬鹿らしくなってきたのか、素っ気ない口調で華琳が返す。

「天の御遣い…ああ、貴方ですの。最近下々が噂してる、胡散くさい人は」

合点がいったのか、袁紹は怒気を収めた。

「では、私のことを知らないのも無理ありませんわね。仕方ないから自己紹介してあげますわ。私は袁紹、字は本初。この大陸でも一番といつてもいい名門の当主にして、類まれなる美貌と財力と実力の持ち主ですわ。おーっほっほっほっほっほっほ!」

何時ものように居丈高に自分の自己紹介(という名の自慢)をする袁紹。そんな彼女の自己紹介(という名の自慢)を、時貞はポケットに手を突っ込んで右から左に聞き流していた。

「あらあら、驚いて声も出ませんか?」

が、何も言わない時貞を都合よく解釈したのか、袁紹は更に気分よく得意げになった。そんな彼女に時貞はニッコリと微笑むと、

「Shut Up. Fuckin', Dirty Bitch」

と、流暢な英語を披露した。

「は？ え？ しゃ、しゃ…？」

袁紹が盛大に頭上に？を浮かべる。しかし、それは何も袁紹に限ったことではない。華琳を始め、その場にいる全員が首を捻っていた。もつとも、英語がわかるわけではないので当然のことであるが。

が、時貞がそんなことを気にする性格なはずもなく、今度こそ用が終わったとばかりに天幕から出ようとする。その時、遠くの方から男と女の入り乱れた声が聞こえてきた。

「!!」

その遠くから聞こえてきた声を聞き、時貞は固まってしまった。そしてただ一点、天幕の入り口を見つめる。

「？ 時貞？」

すつかり固まってしまった時貞に訝しげに華琳が声をかけた。が、時貞は一向に反応を見せない。

「ちよつと、どうし「失礼します」

そのタイミングで天幕が開き、劉備や孫策が入ってきた。そして、

「！」

「!」

そこにいた時貞を見てヒロシとキヨシは固まり、時貞もまたヒロシとキヨシを見て固まったのだった。

「ご主人様?」

「キヨシ?」

「ちよつと、どうしたのよ、時貞ってば」

君主三人が、様子のおかしいそれぞれの神の御遣いに話しかける。が、誰も彼女たちに答えようとはしない。その代わり、

「ひ…ヒロシ? キヨシ?」

最初に口を開いたのは時貞だった。

「と、と、と、時貞あ!」

「マジか!?! マジかテメエ!」

ヒロシとキヨシが我先にと時貞の下へと駆け付けた。

「お前、お前こんなところに居やがったのかよ!」

「テメエ、本物だよな!?! マジモンの時貞だよなあ!?!」

「お、お前たちこそ、何でここに…」

「まあ、その辺りの事情はよ」

「おう。これからゆつくり話してやるからよう。てめーも事情話せや」

そう言うのと、ヒロシとキヨシは時貞の左右からがっちり肩に手をかけた。

「ちよ、ちよつとキヨシ！」

「ご、ご主人様!?!」

展開の速さについていけない雪蓮と桃花がそれぞれの神の御遣いに話しかける。しかし、

「わりーな桃花、パスするわ」

「俺もな。後で詳しいこと教えてくれや、雪蓮」

そしてそのまま三人連れ立って天幕から出ようとする。が、

「ちよつとお待ちなさいな！」

痲癩を起したのは袁紹だった。

『ああつ!?!』

行動を止められて袁紹を睨むヒロシとキヨシ。その鋭い眼光と怒気を孕んだ迫力に多くの諸侯が肝を冷やしたが、生命知らずなのかバカなのか、袁紹は怯むどころかさらに威嚇してきた。

「何ですのあなたたち！勝手に自分たちだけで盛り上がったかと思っただけで出ていくなんて、ここを何処だと思ってますの!？」

「んだとお!？」

「でけー口叩くじゃねえか、おい」

せつかくの再会に水を差され、ヒロシとキヨシは目に見えて機嫌が悪かった。そして肩を組んでいた腕を解いて近づこうとしたのだが、

「ヒロシ、キヨシ、止めとけ」

時貞がそれを制した。

「ああ!？」

「だけどよ、時貞…」

納得いかない表情のヒロシとキヨシだったが、時貞はスツと彼らの顔を自分に近づけさせると、

（あの女はただのバカだ。相手にする価値もないほどのな）

と、彼らにだけ聞こえるように囁いたのだった。

「それより、さっさと行こうぜ」

時貞が促すと、不承不承だったがヒロシとキヨシも歩き出した。

「ちよつと!」

置いてきぼりにされた華琳が不満げにそんな時貞を呼び止めるものの、

「Sorry 大事な用事ができたんでな」

ヒロシとキヨシと同じように素っ気なくそう告げると、三人は足並みを揃えて出ていった。後に残った天幕の中の諸侯は、本来の形に戻った風神と雷神と龍神：三鬼龍を見送ることしかできなかつた。

下

「……つくー！」

徳利から口を離すと、ヒロシはどんと地面にそれを置いた。そして袖口で口元を拭う。

「未だに慣れねえ味だけど、まあ、ないよりはマシだもんな。なあ、時貞よう？」

「Exactly」

肯定の意を表して時貞も徳利に口を付ける。そして中の酒で咽喉を潤すと、同じように地面に徳利を置いた。

「……正直に言えば飲めたもんじやない。けど、〃兄弟〃と一緒になら、不味い酒も美味くなる」

「へッ、何くせーこと言つてやがんだよ、バカ野郎が」

憎まれ口を叩くものの、ヒロシの表情は嬉しそうだ。それがわかつたからこそ、焚き火を挟んで反対側にいる時貞も優しい笑みを浮かべて答えた。

紆余曲折あったものの連合軍は洛陽への最後の関門である虎牢関を抜くことが出来た。そして今はその祝いの酒盛りというところである。当然、三鬼龍も焚き火を囲むよ

うに車座になって、この世界の酒を仰いでいた。

「ところでヒロシ?」

時貞が口を開いた。

「あ?」

ヒロシが答える。

「キヨシはどうした?」

時貞がそう尋ねたのだがそれも無理はなかった。何故ならこの場にキヨシの姿がなかったからである。少し前までは三人で楽しく飲んでいたので、いつの間にかキヨシの姿が見えなくなっていたのだ。

「知らね」

が、ヒロシは簡潔にそう答えただけに留まった。

「いつの間にやらいなくなりやがってよう。オメーこそ知らねえのか? 時貞」

「…いや」

肩を竦めると、時貞は左右に軽く首を振った。

「つたく、何処行きやがったんだよ、あのクマ」

不満げに口を尖らせながらヒロシは再び徳利に口を付ける。と、

「おう、まだやってたな」

キヨシがどこからともなく戻ってきた。そしてその手には、あるものが握られていた。

「何だよ、そりゃ?」

「これか? 大体わかんדר?」

ヒロシの指摘にキヨシがニヤリと笑うと、キヨシは持っていたものを時貞に向かって放り投げた。

難なく時貞がキャッチしたもの：それは、ギターのような形状の楽器だった。

「? キヨシ?」

「なんか演つてくれよ、時貞あ」

ヒロシや時貞と同じように焚き火を囲むように腰を下ろすと、キヨシは徳利に口を付ける。そしてこれまた同じようにぶはあつと袖口で口元を拭い、キヨシはそうリクエストした。

「Wow…」

軽く口笛を吹いて時貞がその楽器に目を移す。

「キヨシ」

「あ?」

「こいつはギターじゃない」

困ったような表情で時貞がその楽器を持って余した。しかし、

「わかってんよ、そんなこと」

キヨシはにべもなく答えた。

「いくら俺たちがおめーと違って音楽に疎いつつても、それがギターじゃねーことぐらい、見ればわかる。けどよ、おめーの超絶テクなら、何とかならねえのか？」

「そーだな」

ヒロシも追隨した。

「てめーのテクならどうにかなりそうじゃねえか。それに、俺らは別にちゃんとした曲じゃなくても構わねえんだよ」

「ん？」

どういふことかわからずに、時貞がヒロシとキヨシの顔を交互に見る。と、

「俺らは、おめーが演ってくれりゃあなんでもいいのさ」

「そーゆーこつたよ、時貞。大事なのは、てめーの『音色』を聞くことなんだからよう」

二人は楽しそうに、そう言った。

「そう……か」

目の前の二人の「兄弟」の向ける視線にくすぐったい感覚を覚えながらも、時貞はギターのようにならその楽器を構えた。そして、ポロン、ジャランと音を奏でる。

「何だよ、やつぱり出来るんじやねえか」

ヒロシがそう揶揄した。が、時貞は軽く首を左右に振る。

「絃を弾いてるだけさ。演奏のうちに入るようなもんじやない」

「構わねーよ、それで」

キヨシが徳利を口にしてそう言った。

「音楽に疎い俺らにとつちやあ、有名な曲だろーが難しい曲だろーが関係ねえ」

「そーゆーこつた。俺らは、お前の音楽が聞きてえんだよ」

「ふふ…嬉しいこと言ってくれるじやないか、ヒロシ、キヨシ」

風神と雷神の言葉に気を良くしたのか、龍神は慣れない楽器を少々苦戦しながらも気持ち良さそうに弾いている。そんな時貞の音楽を、ヒロシは横になって頬杖をつき、キヨシはつまみや酒を口にしながら静かに聞いていた。

即席の、そしてちゃんとした演奏にもなつてない龍神のライブだったが、風神と雷神にはそれでも十分だった。何せ、もう聞けないと思つていた「兄弟」の音色が聞けたのだ。今はそれ以上を望むのは贅沢というものだろう。

近場の兵士たちもちよくちよく視線を向ける中、三人はリラックスした表情でこの時間を楽しんでいた。

「いいなあ……」

そんな三人を遠くから見る人影が一つ。ヒロシが身を寄せている勢力の大将である、桃花である。しかし、その場に居るのは彼女だけではなかった。

「ホント、いい雰囲気よね」

「私たちを無視して、男三人で楽しんでるのはちよつと腹立たしいけどね」

「孫策さん！ 曹操さん！」

示し合わせたわけではないのだろうが、キヨシのところの大将である雪蓮と、時貞のところの大将である華琳である。三人は横並びになると、同じように視線の先にいる三鬼龍を見つめていた。

「……まあ、『兄弟』が久しぶりに顔を合わせればああいう風にもなるか」

「ええ。加えるなら、もう二度と会えないと思つていたんだもの、喜びも一入よね」

「孫策さんに曹操さんも聞いたんですか？ ご主人様たちの事情」

「ええ」

「当然」

桃花の疑問に雪蓮と華琳が大きく頷いた。三人が久しぶりに再会して軍議をフケたあの後、中々戻つてこない彼らに業を煮やした三勢力の大将が、各勢力の神の御遣いを

連れ戻して事情を説明させたのだ。

その結果、彼ら三人の関係性や、もう二度と会えないと思っていたが何の因果かこうして又集まることが出来たという背景を知ることが出来たのである。

故にあれ以降、ちよくちよく三人はこうして集まっては三人だけの時間を楽しんでいたのであった。桃花・雪蓮・華琳の三人も彼らの事情を考慮したのか、作戦行動中などではない、空いた時間ならそれを止めようとはしなかった。

「…でも、今回は凄かったですね、三人とも」

「そうですね」

「ええ」

桃花が話題に上げて雪蓮と華琳が同意したのは、先程までの虎牢関での戦いであった。この戦いで三鬼龍は久々に三人で大暴れしたのだ。

「もし万一のことがあったら大変だから、流石に敵将は遠慮してもらいましたけど、一般兵相手でも十分に活躍してくれましたからね」

「そうですね。まあでも、しようがないんじゃない？ 敵将が敵将ですもの」

「華雄に張遼、そして何と言っても呂布だものね。どの陣営の一線級の武将でも、互角に渡り合うのですら厳しいからね」

「ええ。加えて、あの布一枚羽織ってるだけの格好じゃあ防御は期待できないし、攻撃は

攻撃で徒手空拳ですもの。武将相手じゃ、どうぞ殺してくださいって言うてるようなものよ」

「あはは…」

華琳の辛辣な物言いに、桃花は苦笑するしかなかった。が、

「…でも、あの三人の中で一番活躍したのはやっぱりうちのご主人様ですよね」

と、いきなり且つ決して雪蓮と華琳が看過できない爆弾を落したのだった。

「ちよつと待ちなさい」

「聞き捨てならないわね…」

案の定、雪蓮と華琳は即座に口を挟んできた。

「だって、うちのご主人様が一番敵の兵士さんを倒したじゃないですか。そこを考えると、やっぱり一番はうちのご主人様…風神ですよ」

「何言ってるのよ、うちのキヨシが何度も大岩担ぎ上げて敵陣に放り込んだの見たでしよ? あれで敵兵が怯んだから、残りの二人が好きに攻められたんじゃない。それを考えれば、一番はうちの雷神よ」

「おめでたいわね、貴方たち。好き勝手に暴れるあの二人を支援しながらも、二人に引けをとらないだけの敵兵を倒したうちの龍神…時貞が一番に決まってるじゃない。現に、時貞が割って入らなければ、あの二人が致命傷を負ってた場面が何度もあるわ」

三人はお互いの主張をぶつけ合って決して退こうとはしない。知らず、お互いの視線に見えない火花が散り始めた。

「うちの風神が一番です！」

「何言ってるのよ、うちの雷神に決まってるじゃない！」

「何処に目を付けてるのよ、貴方たち。うちの龍神に敵うと思ってるの!？」

ムムムとばかりに桃花・雪蓮・華琳の三者が敵意をむき出しにしていかがみ合う。が、
『ハハハハハハハハ…』

不意に、笑い声が風に乗って聞こえてきた。その声色に笑い声の聞こえてきた方向を見てみると、三鬼龍が焚き火を囲み、楽しそうに談笑している姿が目に入った。

大分扱いにも慣れてきたのか、時貞の音色も随分それらしいものになり、それを聞きながらヒロシ、キヨシ、時貞の三人は穏やかな表情で何かを喋っていた。

「……」

「……」

「……」

そんな三人の姿を見てしまった桃花・雪蓮・華琳の、同じく三人は誰からともなくいがみ合うのを止めた。そして先程までと同じように横一線になって三鬼龍に視線を向けた。

「バカバカしいわね……」

口を開いたのは華琳だった。

「当の本人たちが楽しそうにしてるのに、私たちがあいつらのことではがみ合ってるなんて」

「そうね」

雪蓮も追隨する。

「久しぶりに『兄弟』に会えたんだもの。外野は大人しくしてましようか」

「そうですね。変なこと言っちゃってすみません」

騒動の原因を作った桃花が二人に謝った。

「私がご主人様……風神を一番だと思ってるように、孫策さんは雷神さんを、曹操さんは龍神さんをそう思ってる。それでいいですよね？」

「そういうことね」

「ええ。どうせこの話題は何処まで行っても平行線よ。そう考えれば、それが一番お互いに納得のいく答えかもしれないわね」

「はいー！」

華琳の指摘に桃花は元気よく頷いたのだった。

「それに、いずれ答えは出るわよ」

「え？」

華琳の言葉に桃花が首を捻ると、華琳はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「私はいずれこの大陸を制覇してみせるわ。そうなればうちの龍神…時貞が本物の神の御遣いということになるでしょう？」

「言ってくれるじゃない」

宣戦布告を受け取って、雪蓮も不敵な笑みを浮かべる。

「大事を成すのは私たちよ。神の御遣いはうちの雷神…キヨシだけで十分だわ」

「わ、私だって負けません！」

桃花も二人に負けじと割って入る。

「今は曹操さんにも孫策さんにも敵いませんけど、天下に対する志はお二人に負けません！ 最後に勝つのは私たちと風神…ご主人様です！」

「へえ…大きく出たわね」

「言ってくれるじゃないの」

三者、再び火花を散らす。しかし先程とは違い、今度は彼女たちの周りに険悪な雰囲気の流れることはなかった。

「…ま、いいわ」

そう言ったのは華琳だった。

「いずれ答えは出るはずよ、嫌でもね。とりあえず今日は…」

その視線をヒロシ、キヨシ、時貞へと再び向けた。

「せっかく楽しんでるあの三人に水を差すのも無粋だしね。これで失礼させてもらうわ」

そして身を翻すと、自分の陣地へと戻っていった。

「それじゃ、私も戻ろうかしら。確かに、男同士の話に女が首突っ込むのは野暮つてもんだしね」

雪蓮も踵を返してこの場を後にした。残ったのは、桃花一人。

「ご主人様…」

少しの間ヒロシに視線を向けていた桃花だったが、やがてペコリと軽く一礼すると、華琳や雪蓮と同じようにその場を後にしたのだった。

残された三鬼龍は自分たちから少し離れた場所でそんなことがあったなどとは露知らず、この時間を過ごしていた。

煌々と燃える焚き火が楽しんでいる三人を照らし出し、そして月の光が優しく彼らを包む。そんなロケーションの中、三人はいつ果てることのない、三人だけの宴会をいつまでもいつまでも楽しんでいたのだった。